稼ぐため越境 タイへ

買われる子どもたち 1

きらびやかな電飾がともる入り口に、女性が数人陣取っている。タイ北部チェンマイ市内のカラオケ店。ドアを開けると、薄暗いホールの先の個室に案内された。

「女の子を呼んでほしい」。そう言うと、ママが女性たちを連れてきた。腰が見えるほど深いスリットが入った、ノーブラの水色の衣装を身にまとった若い女性が16人。ずらりと目の前に並んだ。

女性を選んでそのまま歌ってもいいし、外で性的サービスを受けることもできる。連れ出すには2千～3500バーツ（約6千～1万5000円）を部屋代、飲み物代に加えて払う。女性を約50人抱えるこの店は、日本や韓国からの外国人も来る高級店だ。「日本のお客さんは、とっくに女の子を連れて出て行ったよ」。ひとりの女性が教えてくれた。

女性たちは表向きはみな18歳以上。だが、かつて働いていた女性に話を聞くと、1割ぐらいは18歳未満の子だという。彼女自身も当時は16歳だった。

いまや国際語の「カラオケ」は、タイでは「置屋」と同じ意味で使われる。タイ北部を管轄するタイ第5警察によると、カラオケでの売買春は日常茶飯事。高級店に限らず場末の店でも18歳未満の子どもは少なくない。主に山岳民族やミャンマーの出身だという。

タイの経済成長に伴い、子どもの出身地は国内から周辺に広がる。だまされて売られて来るケースもあるし、自ら働く子もいる。

チェンマイ市の保護施設が昨年、人身売買され、性的に搾取されていたとして保護した子どもは24人。最年少は12歳だった。

ストリートチルドレンも売買の対象だ。こちらも、ミャンマーから国境を越えて来た山岳民族の子どもが多い。女の子だけではなく、男の子もいる。

アカ族のジョン(19)は、9歳のときにミャンマーからタイに来た。最初は道ばたで物乞いをしていたが、そのうちに体を売るようになった。外国人の多いチェンマイのバー周辺をうろつき、誘われればホテルなどに行く。1回500～1千バーツ（約1500～3千円）。客のほとんどは男だ。

学校に行ったことはない。読み書きもできない。

「とにかく金が入れば幸せ」とジョン。稼ぎは大麻などに消える。客は白人が多いが、日本人もいる。

子どもを支援するNGOのスタッフ、ポット(37)は「タイでは簡単に子どもが（性的に）買えてしまう」と嘆く。「子どもたちには体を売ることは金や薬を得る方法。それが法律に違反して、心身にどう影響するかということもわかっていない。でも、彼らに選択肢がないのも事実」とため息をついた。

＝敬称略

◇

世界では100万人前後の子どもが人身売買の犠牲になっているといわれる。国境を越えて子どもが買われるタイ北部を訪ねた。

（文と写真　編集委員・大久保真紀）

タイ（手前）とミャンマーを隔てるのはわずか数㍍の小さな川。この国境を多くの子どもたちが越えてくる＝タイ・メーサイ